

主の公現
マタイ 2・1-12

2013.1.6 9:30 ミサ
オリビエ・シェガレ
(パリミッション会司祭)

公現という言葉は日本の辞書に出ていない。「主の公現」という祝日は起源2世紀、ユダヤ教のハヌッカ「光りの祭り」を引き継いだものだそうだ。西方教会ではエピファニア「公然と現れる」、東方ではテオファニア「神が現れる」とそれぞれの表現は多少違い、訳の問題があるが、両方とも、神の栄光は万人に現れ、世界の人々の上に輝き出ているという、同じような意味を持つ。イエスの誕生を通して、神の栄光は民族の違いを超えて、信者であるかないかに関係なく世界の善意ある全ての人の上であり、又善意ある人々がその輝きに向かって歩んでいるということの意味する。従って、主の公現は世界の人々が自分たちの良心に従い、善を行い、神を探し求めたとき、いつか神の救いを知り、神の栄光に与るという希望を表すお祝いだ。神の救いはキリスト者だけに限らず、全ての人のために用意されているもので、普遍的な広がりを持っている。

主の公現は私の宣教会において主要な祝祭日で、その日に、助祭になった会員は派遣先の国を知らされる。高円寺教会を設立したマイエ神父も私も日本への派遣だったが、日本には善意ある多くの人々が救いを求め、神の栄光に与りたいということを知っていたので、嬉しくなって、大きな希望を感じ、日本に向かって出発したことを思い出す。

今日の福音の箇所に出ている3人の学者は、こうした善意をもって神を探し求める世界の人々の先駆け、代表と言えようか。異教徒の地に住んでいた3人の学者の仕事は星を見ることで、その軌道を観察して、人間の運命、この世の行方を占うということだった。私たちは星を見ることはめったにないですが、古代の人々は星の輝きとその動きは神の御旨を示すものだと思っていたので、常に星に目を向けていた。聖書に出ている3人の学者はまさにそうだったが、彼らは他の占星術学者と違って、星そのものを崇拝していたのではなく、星の彼方にある奥深い神秘の光があると、それに触れたいと思って、動きを見るだけではなく、体を動かし、星の導きに従って出かけていく。ところが旅の末に輝かしい都のエルサレムにたどり着くが、入ってみると、とたんに星が消えた。私たちも度々東京で経験することだが、ピラピカする都会の華やかさやネオンのまぶしさの中に、星の光りそのものが見えなくなってくる。そこで学者

たちは神殿にいる偉い先生たちのところを訪れて、生れ出た王の星は見たが、どこにおられるかと訪ねた。聖書専門の学校を出て、神様のことならなんでも知っていると思い込んでいた先生たちは「ベトレヘムだよ」とすぐ答えるが、彼らはちっとも動いていない。神のことを頭では考えていたが、心が動いていないということだったろうか。

対照的に3人の学者は先生たちの答えを聞くとすぐ旅を続け、ベトレヘムに向かって行く。そして、予想外の貧しい馬小屋の中で彼らが求めていた神様と出会っています。

これは美しい童話ではない。3人の学者のたどったベトレヘムへの道は、私たちがたどって行くべき信仰の道ではないか。洗礼を受けて信者になり、教会に籍があるからといって、私たちはエルサレムの先生たちと同様、神様を知っていると思い込んでいても、心は動ごかないことがある。私たちは3人の学者と同様に、常に真の光りを探し求め、信仰の旅を続けなければ、神様と出会うとは限らない。旅していくうちに、闇におおわれている現実の中に、星のように輝いている小さな希望が見え、それに頼ることができ、徐々に救いが見えてくる。

信仰は遺産である以前に、自分の問いかけからはじまる。この問いに対して求めている答えは、理論や理屈にあるとはかぎらない。むしろあらゆる知識の枠組みや思い込みを崩し、思い切って自分の殻を打ち破り、旅立ちしたときに現れてくる。信仰の旅を進めて行くうちに、神様は私たちの思っていたようなところ、都会の華やかさ、高度な学問の世界、情報の豊富さではなく、私たちが目を向けたくない闇の現実に導いてくださり、何もない貧しさや静けさの中にご自分の栄光を示してくださる。どうか、世界の人々と共にこの世界をおおう闇の中に神の栄光の輝きを見ることができ、信仰と希望の旅を続ける勇気が私たちに与えられるように。